
こちら葛飾区亀有公園前派出所！ 短編集らしきもの

A N G E L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こちら葛飾区亀有公園前派出所！ 短編集らしきもの

【Nコード】

N9631M

【作者名】

ANGEL

【あらすじ】

この頃こち亀にハマっている作者が超不定期に書くこち亀短編集。出来るだけ原作の設定を壊さぬよう作りたいと思います。稚拙な文ですが宜しくお願いします。

給料日前、怪しいアルバイト!? (前書き)

感想、誤字脱字の指摘などよろしくお願いします。

給料日前、怪しいアルバイト！？

「ぶあつかもーーーーん!!!!!!!!!!」

「ぶちよーーーー!!許してください~~~~い!!!!!!!!!!」

「今度という今度はゆるさーん!!!!!!!!!!」

「そんな~~~~!!?」

はい、ここは葛飾区亀有公園前派出所・・・。

「こうしてやるーーーー!!」

「部長!!拳銃はだめーーーー!!」

「うるさーーーーい!!」

両さんこと両津勘吉は大原部長に追い回されています・・・。

部長は手に持った拳銃の銃口を両津に向けた。もちろん両津はあわてて派出所の外に出るが早いのか、そばの自転車にまたがり道路の彼方に消えた。

部長は鼻息も荒く派出所内に戻りため息をつく。

「アイツという奴は・・・」

そばでドタバタを見ていた中川が声をかけた。

「まあまあ、先輩はいつもああですし」

麗子から渡された湯飲みを机に置きながら部長は、

「その『いつも』が問題なのだ」

麗子も道路のほうに顔を向けたため息をついた。

「今日は給料日の3日前だっていうのに、両ちゃんどうやって過すのかしら」

ま、両津は給料日前、超困窮状態に陥るのは当たり前のことですからね。

「おい中川、今回は両津に金を貸してはならんぞ！」

「はい、わかりました」

部長は幾分落ち着いたのか、そばにあった業務日記を取りながら中川に念を押すのであった。

一方両津はというと。

「腹減った・・・」

道路わきのベンチに座り、夏の暑い日ざしをそばにある木の陰でのいでいる。

「くっそ、給料日まで後三日もあるじゃねえか・・・。」

体勢を変え、ベンチに寝転がり、大きなため息を着いた。ちなみに今の両津の持っているお金といえば、たった59円。これじゃあ競馬も出来ないね。

「ちつくしょ〜！作者め！わかりきったことってんじゃねえつ！！」

両津はどこかに向かって大声でさげんだ。

「とにかく、どこか涼しい場所にいくか」

両津はベンチから立ち上がり、夏の直射日光の中を歩き出した。直射日光と地面からの反射熱のせいで10歩と行かないうちから汗があふれてくる。表情も夏バテ感満載である。

「あぢ〜〜〜、んっ！」

両津は熱気で歪む街路樹景色のなかにある建物を見つけ出した。

「やつほ〜〜〜！！コンビニだ！」

そう言うが早いか両津はコンビニめがけて走り始めた。

「いらっしゃいませ」

両津はコンビニの自動ドアをくぐり抜け、店員の挨拶を聞くと目をつぶった。

—— ああ、神様、感謝いたします。

凄まじく安っぽい感謝が終わると両津は店内の端っこにある雑誌売場に足を運んだ。

「おっ、少年マガシンの新刊がでんじゃねえか」

当然、目についたマンガ雑誌を手にとりまして立ち読みを開始しました。

20分程して読み終わると雑誌を棚に返した。

と、その時、両津はガラスの壁に貼ってあるお知らせに目を留めた。

「んっ！これは」

『簡単かつやりがいのある仕事をしませんか？今お金が無くて一日だけ働きたいという人も大歓迎！詳しくは下記の電話番号が住所まで』

…うさんくさっ

両津は、

「おっ、これこそ天の助けって奴かな」

まったく疑いもせず、制服を着替えてその住所にむけて出発するのであった。

で、その住所。

「ここかな」

周りを見渡すと背の低いアパートが立ち並び、道は今さっきのコン

ビニ脇の道路より細くなっている。

当の住所の建物も周りの建物と同じような作りだ。

「ま、入ってみるか」

両津はアパートの玄関に踏み込んだ。

すると後ろから、

「おいあんた、仕事探しにきたのかい？」

両津は少し驚いて頷いた。

「あ、ああ」

「ならここはちがうぜ。」

話しかけてきた男は帽子を目深にかぶり、シガーを吸っている。

「どういうことだ？」

「ああ、あんたチラシを見てきたんだろ」

「ああ」

「そのチラシを作った奴が住所を間違えたんだ。いまさらなおして回るわけにも行かねえから俺が案内役でここにいたんだ」

「そついうことか」

男はシガーを道脇の溝に捨て道端の車に手招きした。

「ほらこれに乗りな」

両津は車に乗りながら感心した。

「赤のミニクーパーか」

運転席に男がのり、窓にブラインドをかける。

「直射日光がきついからな」

なにか聞いたそうにしていた両津に男は言った。

それから１０分、かなり退屈な時間が続いた。

窓の外は見えないし、男はなにもしゃべらないからだ。しかもフロントガラスもブラインドがかけてあり、外が見えるのは運転席の前方のみだからだ。

「ほら着いた」

男は言うが早いか運転席から降り、両津もそれに習った。

「ここはどこだ？」

両津は車内から全く外をみる機会がなかったためよく場所がわかっていないようだ。

男は両津の疑問にかまわず、今さっきとおなじようなアパートに入っていた。

「ちょっとまってくれよ！」

両津は男に部屋へ通された。なかなか殺風景な部屋で、家具は机と棚くらいだ。

窓側の机に男がすわっている。

両津はすわっている男に話しかけた。

「私は仕事を探しにきた両津勘吉です」

無言…

「あの」

無言…

「えーと」

無言…

「その…」

無言…

ぷちっ

「てめーっ！返事ぐらいしたらどうだ！！」

夏の暑さと給料日前の空腹感のイライラがはじけた。

すわっている男はやっと口を開いた。

「君がどういう人物かこの仕事には関係ない。採用」

イライラをぶつけかけた両津は態度一転、媚び始めた。

「はい、私、精一杯仕事頑張ります！」

男は頷き、両津に紙袋を手渡した。

「その袋の中には一応給料がはいっている」

「え!？」

「前払い制なのだ。あと仕事道具も入っている」

両津は早速中を探ると現金が5000円、あと小麦粉と腹痛薬。おまけにストローや銀紙、葉巻、ライターが入っていた。

「君には今から、この品物をとどけてもらう。まあ、これだけの仕事にこんな大金を払う必要はないと思うかもしれないが届け先が遠いのでな」

(両津は現金の使い道を考えるのに夢中らしく目がイってます)

「ここから20キロ程離れたところなのだが。詳しい住所は紙袋の中にある」

両津は我に返り頷いた。

「わかりました、この不肖両津勘吉、命を懸けて荷物をお届けいたします!」

「で、これが制服だ」

男が指差した方をみると、ハンティング帽子にジャージだ。

「え！？これですか」

「暑いと思うが頼む」

一方派出所。

「両ちゃん、帰って来ないわね」

呟く麗子に対して部長は、

「あの馬鹿がいない方が仕事がかどる」

辛辣に言い放つ。

「あ、部長」

「どうした中川？」

中川は両津の机から書類を取り出し部長に見せた。

「この配布先の氏名なんですけど」

麗子が扇風機のスイッチを押しながら注意する。

「圭ちゃん、両ちゃんの仕事は両ちゃん自身にやらせるべきよ」

「そうだ。どれ、私が一応預かっておこつ」

部長も同調し、書類を預かった。

その時、電話の呼び出し音が鳴り響いた。

「おっ、中川、出てくれ」

「はい、もしもし、こちら葛飾区亀有公園前派出所。……え！？あ、了解しました」

「どうした？中川」

電話を置き、中川が答えた。

「この近辺で麻薬の取引が行われるとの情報が入りました。ソースも信頼できるようです」

「なに？」

「付近の警察官は至急警戒を強めるように通達されました」

「よし、中川、車でパトロールだ。麗子君は派出所に残り、近辺からの情報に対応してくれ」

「了解」

その頃両津は、

「ここでおろすぞ」

「お、ありがとうございます」

今さっきの男に自転車を置いたところまで送ってもらい、一路目的地に向かい自転車を漕ぎ出した。

両津はビルの合間を縫うように進み国道に出た。
すると、

「げ！？中川のカフェーリ！」

フェラーリでパトロールを続ける部長が中川に聞いた。

「犯人はどこでとり引きするんだ？」

「イギリス辺りではアンダーパスが主流ですけど…あ、無線が。こちら中川巡査、…了解」

「どうした？」

「犯人のだいたいの服装が垂れ込まれたそうです。ジャージにハン

チング帽子です」

「ふむ、ん？あれは」

「どうしました？」

「あの左の自転車だ」

中川がそちらを見ると確かに自転車にのった人影が見える。しかし問題なのは…、

「ジャージにハンチング帽子ですね」

「ああ、中川、そこに車を止めてくれ。職質をかける」

「はい、いつでも発車できるようにしておきます」

「頼む」

部長は車をおり自転車に近付いていった。

「ちつ部長が近付いてくる…こうなったら」

両津が帽子を目深にかぶり逃走策を考えているうちに部長が話しかけてきた。

「すみません、警察です」

部長が警察手帳を取り出した途端、両津が鼻声で、

「あ、あんなところに指名手配されている殻奈佐長介が!!」

「なに？」

部長が思わず背後を向いた隙を両津は見逃さなかった。

自転車をジャックナイフターン（後輪を浮かして車体方向を変える技。元々はマウンテンバイクの技術）させ、一目散に逃げ出した。

「な、ちょっと待ちなさい！」

「くそ！こんな所で捕まってたまるか！」

「やはりあいつが運び屋か」

部長は中川のフェラーリに急いで戻ると、叫んだ。

「中川、逃がすなーっ！」

「はい！」

中川は車を発進させ、自転車を追跡し始めた。部長はフェラーリの上部に赤色灯を取り付け、いつの間にか持っていたハンディ拡声器で叫んだ。

『前を走っている自転車！止まりなさいっ』

両津は必死に自転車を漕ぎながら逃走経路を探していた。

「部長め、拡声器まで持ち出すとは…おっ」

両津はビルの間にある小道に目を留めた。

「ちゃんす」

両津はいきなりブレーキをかけ、道にタイヤ痕を残しつつ直角にドリフトし、小道に入り込んだ。

「おい中川、小道に入ってしまったぞ」

「わかりました」

中川はいきなりギアを変え、小道に車体をたてるようにして入り込んだ。

まだ自転車は逃げ切っておらず40メートル足らず離れたところを走っている。

小道じたいはそこまで長くなく、すぐ他の道につながり、フェラーリはやっと普通の体勢に戻った。

しかし、

「あ？犯人は？」

部長は道路の周りを見渡しながら声を上げる。中川も困惑した様子で、

「どこにいったんでしょう？」

と、首を傾げた。

赤い中川のフェラーリの近くにあるマンホールの中、轟音を響かせつつ、一台の自転車が走っていた。

「くそ！部長達のせいでかなり遅れっちまうな。だが、ムリヤリ自転車を入れたかいはあつたぜ。このまま目的地に直行だ！」

部長達は10分近く辺りを探し回ったが犯人を見つけられず、無線で報告していた。

「…はい、残念ながら取り逃がしました」

部長が悔しそうに、

「はんにんめ！」

と呟いた。だが、無線を終えた中川が驚くべき知らせを話した。

「部長、麻薬の取引場所がわかったそうです！」

「なにっ？急行するんだ！」

「はあはあ、やっとついたぜ、」

両津は紙袋に入っていたメモを取り出し、住所を確認する。
両津の目の前にある建物は住宅街によくあるような二階建ての民家で、別にな変わった特に変わったことはない。

「よし、さつさと渡すか」

両津は玄関前の観音開きの門に手をかけた。

そのとたん、

「かかれーーーーっ！」

「おおーーーーー！」

「おりゃーーーーっ」

どでかい叫び声が聞こえるとともに警察官が、ざっと40人ほど四方八方から飛び出してきた。

「な、なんだ！？う、うわっ」

ゴキブリ並みの生命力並びに、地球人離れしたしぶとさを持つ両津も、この不意打ちには対応できなかった。

「逮捕だ！！」

真っ先に躍り出た大原部長が犯人の帽子をむしり取った。

で、当然…。

「り、両津！？」

「ぶ、部長…ご無沙汰しております」

その後、両津は麻薬取引の囹として使われていたことがわかり、部長や署長にたつぷり搾られ、オマケに早めの夏休みとして停職2週間を喰らってしまいましたとさ。

「給料日前なのに~~~~~!」

給料日前、怪しいアルバイト！？（後書き）

かなり不定期更新になります。
（^―^；）
どうか時々見に来てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9631m/>

こちら葛飾区亀有公園前派出所！ 短編集らしきもの

2010年10月10日02時18分発行